

## 総務文教常任委員会行政視察報告書

<p>*報告者 委員長 宮 利徳</p>
<p>*視察研修参加議員名 宮 利徳、松島 緑、川股 洋一、柏野 大介、武藤 光一 矢野 浩章 計6名</p>
<p>*視察研修日程 令和8年1月14日（水）～1月16日（金）の2泊3日</p>
<p>*視察研修項目</p> <p>1月14日（水）大阪府富田林市 大阪府立富田林中学校・高等学校 「大阪府立富田林中学校・高等学校における富高版コミュニティ・スクールの取組について」</p> <p>1月15日（木）大阪府柏原市 柏原市立歴史資料館 「柏原市立歴史資料館における古墳出土品及び展示企画の取組について」</p> <p>1月16日（金）兵庫県加古川市 加古川市役所 「加古川市版デンディムについて」</p>

報告書 2 - 1

視察研修先 大阪府富田林市 大阪府立富田林中学校・高等学校

視察研修項目 大阪府立富田林中学校・高等学校における富高版コミュニティ・スクールの取組について

研修先対応者（名刺等）・研修風景（写真等）・研修資料等

\*名刺・写真・資料等\*



報告書 2 - 2

視察研修先 大阪府柏原市 柏原市立歴史資料館

視察研修項目 柏原市立歴史資料館における古墳出土品及び展示企画の取組について

研修先対応者（名刺等）・研修風景（写真等）・研修資料等

\*名刺・写真・資料等\*





視察研修先 兵庫県加古川市 加古川市役所

視察研修項目 加古川市版デンディムについて

研修先対応者（名刺等）・研修風景（写真等）・研修資料等

\*名刺・写真・資料等\*



視察研修先・大阪府富田林市 大阪府立富田林中学校・高等学校
視察研修項目・大阪府立富田林中学校・高等学校における富高版コミュニティ・スクールの取組について
報告者・宮 利徳
<p><b>大阪市富田林市の概要</b>  人口 104,687 人 (R8/1/31 時点) 2002 年をピークに減少傾向 (2002 年 126,400 人)  R7 年度予算 84,594 百万円 (一般会計 51,932 百万円)</p> <p><b>1. 視察の背景と目的</b>  本市のコミュニティスクールの発展において、教員の多忙化と教育改革の停滞という課題対し、地域協働を核とした持続可能な学校経営を実現している大阪府立富田林中学校・高等学校 (以下、「富田林中高」) の先進的な取り組みについて学ぶ。  特に、<b>卒業生 (OB) が主体となって設立を推進し、現在も運営の中核を担っている</b>という全国的にも稀有なコミュニティスクール (CS) モデル「富高版コミスク」の実態を調査し、本市における地域連携の在り方への示唆を得ることを目的とする。</p> <p><b>2. 学校の概要と設立の特異性：OB 主導のボトムアップ改革</b>  富田林中高の最大の特徴は、その設立から現在の運営に至るまで、「<b>卒業生 (同窓会)</b>」が強力なリーダーシップを発揮している点にある。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● <b>OB による設立運動</b>：地域の人口減少や教育環境の変化に危機感を持った同窓会が中心となり、「自分たちの母校を、地域を代表する一貫校として再生させる」という強い意志のもと、府への働きかけから設立までをボトムアップで牽引した。</li> <li>● <b>「評論家」ではなく「当事者」としての参画</b>：一般的な CS が地域住民や保護者の「ボランティア」に依存するのに対し、同校では「母校への愛着」と「地域への責任感」を持つ OB が組織的に関与しており、これが活動の継続性と実効性の源泉となっている。</li> <li>● <b>教育目標</b>：「<b>グローバルリーダー</b>」の育成を掲げ、OB が持つ社会人としてのネットワークが、生徒の学びを社会へ繋げるパイプ役を果たしている。</li> </ul> <p>※グローバルはグローバルとローカルを併せた造語</p> <p><b>3. 「富高版コミスク」の革新的組織構造</b>  同校は、従来の「助言機関」としての CS を脱却し、「<b>実行組織</b>」としての構造を構築している。</p> <p><b>3.1 CS コーディネーター会議の役割</b>  学校運営協議会 (理念共有) の下に、実務を担う「CS コーディネーター会議」を設置。ここでも OB を含む地域人材が活躍している。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● <b>渉外業務の完全代行</b>：探究学習における企業・大学へのアポイントメントや趣旨説明を、教員ではなくコーディネーターが担当。</li> <li>● <b>教員のベネフィット</b>：外部連携に伴う事務負担が劇的に軽減されることで、教員が本来の役割である「生徒と向き合う時間」を確保でき、実質的な働き方改革に直結している。</li> </ul>

#### 4. 具体的な取組と成果

OB ネットワークと CS コーディネーターの連携により、極めて実践的な教育プログラムが展開されている。

分野	連携・支援の形	具体的な成果例
探究学習	OB 企業 地元企業	産官学連携による実地調査、専門家によるフィードバックの日常化。
起業家教育	社会人メンター	「リアビズ起業コンテスト」にて地域特産品「海老芋」のビジネスプランでグランプリ受賞。
学校運営	多角的な参画	授業改善、生徒指導、働き方改革の各委員会へ外部視点を注入。

#### 5. 持続可能性を担保する「NPO 法人」の設置

同窓会（OB）が NPO 法人「学びと育ち南河内ネットワーク」を設立し、運営を制度的に支えている。

- **財政基盤の自立：**行政予算だけに頼らず、NPO を通じて外部専門家（弁護士等）への謝礼を支払う体制を構築。これにより、善意に甘えない「プロフェッショナルな協働」が可能。
- **教員満足度の向上：**「6 年間継続して生徒を育てられる」という一貫校の魅力に加え、OB による手厚い事務サポートがあることで、教員の離職防止やモチベーション維持に寄与している。

#### 6. 富田林中高の成功要因

富田林中高の成功は、「制度としての CS」を導入したことではなく、「誰が、何のために動くか」を明確にした点にあると考える。

1. **「卒業生」というステークホルダーの再発見：**学校にとって最も強力な支援者になり得る OB を、学校運営のパートナーとして公式に位置づけている。
2. **実行力の組織化：**「会議」で終わらせず、コーディネーターという「動く組織」を作ったこと。
3. **教員を助ける仕組み：**改革を教員の負担にするのではなく、外部の力で「教員を楽にする」という設計思想。

#### まとめ

富田林中高の事例は、学校・OB・地域が「win-win-win」の関係を築いた理想的なモデルである。本市においては、同窓会組織がない状態であり、すぐに富田林のような組織、運営は難しいと考える。しかながら、本市においては地域住民・団体による社会教育活動は盛んに行われおり、「地域の子どもは地域で育てる」といった活動の土台は存在していると考えられる。

今後は教員の負担を軽減しながら教育の質を高める「実行型コミュニティスクール」への転換を目指し、さらに調査研究を継続していきたい。

視察研修先・大阪府柏原市 柏原市立歴史資料館

視察研修項目・柏原市立歴史資料館における古墳出土品及び展示企画の取組について

報告者・宮 利徳

## 柏原市の概要

人口 66,131 人 (R7.12 月末時点)

R7 年度予算 57,172 百万円 (一般会計 29,232 百万円)

柏原市は大阪平野の南東部、大和川と石川の合流点に位置し、市域の3分の2を山地が占める。奈良盆地からの諸流が集まる地理的要衝であり、古来より交通・戦略上の重要拠点として発展してきた。

### 1. 視察の背景と

本市においては郷土資料館の老朽化、また、重要文化財を含む出土品の保存と展示が課題となっている。地域文化財の保存と活用の先進事例を調査し、本市の文化行政における指針を得ることを目的とする。地方自治体において、地域遺産の保護は単なる過去の記録に留まらず、シビックプライドの醸成や教育的価値の創出、さらには観光資源化を通じた地域活性化に直結する重要な政策的課題である。柏原市は膨大な埋蔵文化財を抱えつつ、それをいかに市民に還元しているかという点で、本市が学ぶべき点が多いと考えている。

### 歴史的変遷とアイデンティティ

- **3 万年の歴史と古墳群:** 旧石器時代から続く約 3 万年の歴史を誇る。国史跡の松岳山古墳や玉手山古墳群、高井田横穴群など、全国屈指の規模を誇る古墳の密集地であり、これが地域のアイデンティティの核となっている。
- **大和川付け替えと産業構造の変遷:** 宝永元年 (1704 年) の大和川付け替え工事は、柏原の歴史における最大の転換点であった。この工事は慢性的な洪水被害を解消しただけでなく、現在の市域を形成する「土地そのものを創出した」土木の基礎である。
- **「河内木綿」から「柏原ぶどう」へ:** 旧川床での新田開発により、かつては全国ブランドの「河内木綿」が隆盛を極めた。しかし、明治時代の外国産綿花の輸入増に伴い衰退。これを受け、新たな産業として「柏原ぶどう」の栽培へと転換を図った歴史がある。この経済的適応能力は、同市の文化的な底力となっている。
- **沿革:** 昭和 31 年の柏原町と国分町の合併を経て、昭和 33 年に大阪府下 25 番目の市として市制を施行した。

### 2. 柏原市立歴史資料館の設立経緯と施設概要

本施設は、単なる資料の保管庫ではなく、市民のアイデンティティ形成と学術的調査を支える知的拠点として設計されている。

#### 設立の歴史的必然性

高井田横穴群をはじめとする国指定史跡や、市内の開発に伴う膨大な出土資料、近世の柏原船に関する古文書を一元的に管理・公開するため、平成 4 年 (1992 年) 11 月 7 日に開館した。これは、地域の埋蔵文化財を適切に保護するという行政的責任を具現化したものである。

#### 施設構造と政策的判断

- **基本スペック:** 鉄筋コンクリート造 3 階建、延床面積 1490.104 平方メートル。収蔵と展示の双方に最適化された設計となっている。
- **社会関係資本への配慮:** 入館料を「無料」とし、収益性よりも市民の歴史教育へのアクセシビリティを優先し、社会関係資本の蓄積と郷土愛の醸成を重視している。

#### 行政的最適化の評価

施設規模や無料公開という運営形態は、市内に点在する膨大な埋蔵文化財を「市民共有の財産」として還元するための施策であり、ハードとソフトの両面で地域資源の保護責任を果たすべく最適化されている。

### 3. 文化財・考古資料の保管に関する思想と実践

資料の保管は、過去の遺物を守る「静的な防衛」ではなく、未来の地域資源を育む「動的な投資」として位置づけられている。

#### 保管に関する基本姿勢（恵庭市との比較）

資料保管の基本思想は恵庭市と概ね共通しており、地域資源の恒久的な保全を主眼としている。土器等の考古資料に加え、かつての生活様式を伝える民具（「柏原ぶどう」によるワイン造りの道具等）を体系的に収集している。

#### 主要な保管・展示資料

- **考古資料：** 旧石器時代から中世の出土品、特に高井田横穴群の線刻壁画の実寸大レプリカ。
- **近世・近代資料：** 大和川付け替え関連の絵図や古文書、および地域ブランドであるワイン産業の変遷を伝える資料。

#### 独自テーマによる差別化

他都市との差別化は、「大和川」と「ワイン」という二大独自テーマを資料選定の軸に据えている点にある。汎用的な歴史展示に終始せず、地域固有の文脈を強調することで、市民が歴史を「自分事」として捉えやすい環境を構築している。

### 4. 展示活動の特色と恵庭市への示唆

静的な資料保全を教育・観光資源へと変換する「企画展」の戦略的運用

#### 企画展の頻度と教育課程との同期

年間 4 回の企画展を実施しているが、白眉は「秋季企画展」である。地元の小学校が学習する「大和川の付け替え」の時期に合わせ、教材と連動した展示を展開している。

- **実績の定量化：** 令和 6 年度の入館者数 15,287 人のうち、秋季企画展には 7,650 人が来館。年間入館者の約 50%をこの時期に集中させる戦略は、教育機関との連携がいかに強力な集客力を持つかを証明している。

#### 展示スペースの柔軟性と集客戦略

恵庭市の既存施設と比較して企画展スペースが広く確保されており、高井田横穴群のレプリカのような大型資料の展示が可能となっている。この「展示空間の柔軟性」が、視覚的な訴求力と満足度向上に寄与している。また、近鉄主催の「謎解きツアー」との連携など、民間企業との連携により来館者の増加が図られている。

### 5. まとめ

今回の視察により、柏原市の歴史的アイデンティティを軸とした安定的な資料館運営の実態を確認できた。

柏原市は、大和川の付け替えという歴史的必然性を展示の核に据え、空間を最大限に活用した動的な展示手法を確立している。学校教育との徹底的な連携は、郷土愛の醸成などにも寄与している。

本市の今後の検討事項としては、「資料館の展示サイクルと学校教育カリキュラムとの更なる連携」であると考えられる。柏原市の事例が示す通り、秋季の教育重点期にリソースを集中させ、学校の授業を資料館で補完する体制を構築することは、次世代の郷土愛を育む重要な施策となる。また、大型資料の展示を前提とした空間活用は、今後の本市の文化財行政における施設改修や運営指針において、重要な要素であると考えられる。

館外での展示も含め、展示スペースの確保については今後さらに調査研究が必要である。

視察研修先・兵庫県加古川市 加古川市役所

視察研修項目・加古川市版デシディムについて

報告者・宮 利徳

### 加古川市の概要

人口 252,997 人 (R8.2.1 時点) H27 年 267,000 人から減少傾向  
R7 年度予算 192,040 百万円 (一般会計 106,523 百万円)

### 1. 視察の目的と背景

恵庭市においては、まちづくり基本条例等に定められている「市民主体のまちづくり」を推進するに当たり、広く市民の声を聞くための新たな方策の検討が必要であると考えている。

加古川市におけるスマートシティ推進は、単なる利便性の追求ではなく、都市の存立基盤に関わる課題解決を起点としている。かつて同市は、刑法犯認知件数の多さに加え、2007 年の小学 2 年生女児殺害事件という極めて痛ましい事案を経験した。この悲劇を契機に、市は「選ばれるベッドタウン」への回帰を目指し、住民の生活の質 (QoL) の根幹である「安全・安心」の確保を最優先の戦略目標に据えた。

加古川市の主な取組みは

- デジタル技術を「信頼のインフラ」へと昇華させた「見守りカメラ事業」の運用。
- 住民の声を政策に反映させる国内初の合意形成プラットフォーム「Decidim」の活用。
- 先端技術 (AI・人流分析・浸水センサ) の融合による多角的なまちづくり施策。

加古川警察署との「見守りカメラの設置及び運用に係る協定」の締結 (平成 30 年) を含めた、警察との緊密な連携により、行政への信頼回復と、安全という物理的な価値をデジタルで保障することが、スマートシティ化の強力な推進力となっている。

### 2. 見守りカメラの導入について

加古川市の見守りは、ハードウェアの整備と、プライバシー配慮というソフト面でのガバナンスが両立されている。

#### 設置規模と信頼構築のプロセス

- **1,475 台の市主体整備**： 小学校区ごとに約 50 台を集中配置。町内会設置分への助成もを行い、隙間のない網羅性を確保
- **徹底した対話と制度化**： 市長自らが地区ごとのオープンミーティングで説明を重ね、「見守りカメラの設置及び運用に関する条例」を制定。画像の自動変換、夜間カラー撮影、任意のプライバシーマスク適用といった技術的配慮を条例で担保することで、市民からの理解を獲得

#### EBPM (証拠に基づく政策立案) の実践

- **3D 都市モデルの活用**： 駅周辺の約 500 台分を対象に、3D 都市モデル上でカメラの可視領域をシミュレーションし、死角の確認やカバー範囲の最適化を行っている。これは勘に頼らないデータ主導のインフラ配置 (EBPM) の先進事例となっている。

#### 犯罪抑止の実績

設置前 (平成 29 年) の 2,926 件から、令和 3 年には 1,433 件へと、わずか 4 年で**犯罪件数はほぼ半減**している。令和 6 年時点でも 1,761 件 (約 4 割減) という低水準を維持しており、プライバシー保護と公共の安全を両立させている。

### 3. 加古川版 Decidim の導入

カメラ設置で培われた行政への信頼を背景に、市はスペイン・バルセロナ発の合意形成プラットフォーム「Decidim (デシディム)」を国内で初めて導入。

## 導入の背景と戦略的役割

- **参画障壁の打破：** コロナ禍での対面対話の困難さの解消に加え、仕事や育児で時間の制約が大きい**現役世代の声を吸い上げるツール**として位置づけ
- **日本語版の構築を主導：** 認定 NPO 法人「Code for Japan」と協定を締結し、加古川市が自ら日本語版作成に協力。単なる導入自治体ではなく、日本の地方自治体に適合するプラットフォームの「育ての親」としての役割を果たした。

### 「共創」の基盤としての評価

Decidim は単なるアンケートツールではなく、意見聴取から情報発信、双方向の議論、そして施策反映へのプロセスを可視化することで、市民を「受動的なサービス享受者」から「まちづくりの主体」へと変容させる、**デジタル時代の民主主義インフラ**として機能を果たしている。

## 4. 施策の相乗効果

見守りカメラ、Decidim、そして蓄積されたデータが、多角的なスマートシティ施策へと波及  
**AI 高度化と倫理的ガバナンス**

- **高度化見守りカメラ (AI) の配備：** 150 台 (I 型 100 台、II 型 50 台) の AI カメラが、悲鳴や怒声を検知し回転灯とスピーカーで即座に警告。さらに、危険運転検知特化型 3 台の導入により、交通事故の未然防止にも着手している。
- **倫理フレームワークによる検証：** AI 導入にあたり、独自の倫理フレームワークを構築。14 個の「**つまずきポイント**」と 49 個の**チェック項目**を用いて運用を検証し、全項目での適正を確認。自治体 DX における最大の懸念である「AI の倫理リスク」に対し、実務的な解決策を講じている。

### 広域的な波及効果と民間連携

- **見守りサービスの深化：** BLE タグを活用し、コープこうべ等の民間企業やボランティアを巻き込んだ官民連携見守りを実施。
- **防災と行政改革：** ワンコイン浸水センサによるアンダーパスの水位可視化や、**約 1,100 件の手続きオンライン化 (R5 年度)**、「書かないワンストップ窓口」の実現など、安全施策で得た信頼が窓口業務 DX の推進力となっている。

### 価値創造の分析

個別の技術導入に終始せず、データと市民の声を循環させることで、まちづくり全体の質を向上させている。

## 5. 恵庭市における検討事項

1. **ハードとソフトの戦略的補完：** 監視ではない「見守り (カメラ)」による安心の提供と、Decidim 等による対話を組み合わせた、住民の不安解消と主権者意識を高める方策。
2. **透明性とガバナンスの確保：** 49 項目に及ぶ倫理フレームワークや条例制定など、デジタル技術と倫理の両立した体制の構築。
3. **地域の課題解消のための施策：** 治安や防災といった、全市民が共有する「安全」という課題を一つずつ解消することで、市民の信頼と住民参画の幅を広げる。

## まとめ

恵庭市においても、行政手続きをはじめ、様々な分野でデジタル技術を導入している。単なる効率化の手段としてではなく、「住民との信頼を再構築する装置」として位置づけるの必要を感じた。特に、これまで政策決定から疎遠になりがちだった世代の声を Decidim 等のプラットフォームで拾い上げ、EBPM に基づいた納得感のある施策を展開することが、持続可能なまちづくりにおいて必要であると考えられる。

本視察で得た「新たなプラットホームの可能性」「EBPM の視点」「具体的倫理検証の手法」を、今後の恵庭市のデジタル化推進に反映させるため、今後も調査研究を続けていきたい。

視察研修先・大阪府立富田林中学校・高等学校
視察研修項目・大阪府立富田林中学校・高等学校における富校版コミュニティ・スクールの取組について
報告者・松島 緑
<p>全国的に深刻な人口減少が進む中で、恵庭市では人口が微増となっている。活力ある魅力的なまちであり続ける為に、子供たちを中心とした地域と学校が連携して未来を創る「地域学校協働活動（コムスク活動）」を推進しています。今後の課題として地域学校協働活動の主体的な担い手の確保、コムスクの形骸化の防止、持続可能な運営と地域・学校の理解の促進が求められます、これらを含め先進的に進めている、富田林中学校・高校一貫教育における富校版コミュニティスクールを視察することとした。</p> <p>富田林市は大阪中心部から電車で25分ベットタウンとして発展してきたまち。人口は2002年12万人をピークに2025年には10.3万人まで減少傾向となっていた。</p> <p>富田林中学校・高等学校は府立高校として2017年に府立学校として初めて併設型として誕生した。120年以上歴史を持つ富田林高校の伝統継承しつつ6年間の計画的なグローバル教育、地域に根差した、教育重視。併設型中高一貫教育とコミュニティスクールの取り組みについてこれまでの課題として、教育委員会事務局では、学校教育と社会教育主管課が分離、校長への情報提供、社会教育主幹課から高校への指導助言が困難であった。新たな仕組みとして学校運営会議CSコーディネーター会議の設置、(学校関係者)と(同窓会・企業・地域)←コーディネーターズを結成した。学校運営協議会委員・コーディネーターズが実働。協働企業決定までを学校運営協議会委員コーディネーターズが実働したことで連携企業150社となった。また成果として教員の負担軽減。生徒は社会貢献意識と地域愛・論理的思考力と課題発見解決能力とされる。</p> <p>コミュニティスクールの取り組みについては、SSH(スーパーサイエンスハイスクール)に指定され、「探究活動、地域連携、国際交流」の3本柱を特徴として地域と連携した地域に根差しながら世界へ貢献する「グローバル」な人材を育成を目指していた。</p> <p>グローバル教育とは地域と連携した、グローバルな視点を持つ人材育成教育を推進助成教育SSHによる地域と連携した探究活動とは理数系にかかわらず社会探究学習を重視し、体験重視の科学教育を地域と共に行っている。学校・地域・NPOが一体となった支援体制となっている。</p> <p>この様に大きく地域と学校と企業また同窓会と大きく連携できていることに驚き、子供たちの可能性を地域と企業、同窓会に見守られ大きく成長できる機会を持つことができ、地域に根差したグローバル人材育成、また中高一貫としてのメリットとして6年間掛けて学ぶことができ将来への人生設計や目的をもって学ぶことができること、若い世代が地元へ留まりたいと思えるのではないかと感じた。また、今後のまちの発展としての人材育成に大きく影響していくのではないかと、従来では大学へ進学すると地元を離れることも多く、また更に就職で市外へ出てしまう傾向となってしまう。今後本市としても改めてコミュニティスクールあり方について検討すべきと感じた。</p>

視察研修先・大阪府柏原市
視察研修項目・柏原市立歴史資料館における古墳出土品及び展示企画の取組について
報告者・松島 緑
<p>恵庭市の郷土資料館では施設の老朽化と管理が課題となっている、埋蔵文化財も多く発掘されている、限られた保管場所での管理、今後の運営について継承、多世代へのアプローチも必要とされる。視察研修先として柏原市歴史資料館の古墳や遺跡からの出土品を中心とした古代から中世まで考古資料、縄文時代から江戸時代に至るまでの歴史を知ることができる資料館を視察することとした。</p> <p>柏原市は大和川、石川、生駒山地といった豊かな水と緑に恵まれ、古くから大和〈奈良〉と川内（大阪）を結ぶ交通の要衝、人の往来物流が盛んとされる。各時代の重要拠点であったことから多くの遺跡遺物が残っていた。古代において柏原は河内国の中心地。玉手山古墳群や高井田横穴墓群等大規模な古墳多く古代寺院の建立飛鳥・奈良時代には官立級の寺院が建立され、政治・宗教の拠点が集中したことで質の高い出土品が数多く発見された。この地域は朝鮮半島から渡来人集団が安住した場所。柏原市内では土壌の条件により、弥生時代や古墳時代の遺構・遺物が状態よく多く発掘されていた。考古学的に価値の高い地域とされている。</p> <p>多くの出土品は資料館で管理、消防設備、温度空調、機械警備を備え館内収蔵庫のスペースはある程度は管理できる施設となっている。貴重な資料は管内、それ以外は収蔵庫に保管。保管場所については十分な広さもあり、見やすい形となっていたが課題として常設展示の入り口にある松岳山古墳出土の楕円筒埴輪は直径42cm高さ160cmもあり4世紀頃のものとして大変に珍しく全国でも類例がなく貴重なものであるが、横揺れに対して崩れやすく地震などあれば崩れてしまうとのことですが対策など管理が難しいとのことでした、また建物自体が階段しかなくバリアフリーとなっていない為、足が不自由な高齢者、車いすの方など来館者への対応に限られることなどが課題とのことであった。しかしながら歴史資料館の敷地続きに高井田横穴公園があり6、7世紀ころに造られたお墓がこの辺りで200基ほどあったようです。その中でも高井田古墳は一番高いところにあり5世紀頃の円墳。歴史的な時代背景柏原の古い歴史を感じ、見所が沢山ある資料館となっていた。</p> <p>恵庭市の郷土資料館においては縄文時代の縄文土器やアイヌ文化財も多く国指定重要文化財である、カリン場バ遺跡の漆塗り製品など貴重な考古資料を中心に展示、子供向けカリンバ祭りなど、また収集資料の巡回展示など普及活動行っている。今後の課題として運営を支えているボランティアの減少や高齢化、施設の老朽化、アイヌ文化財の継承等の担い手不足が課題となる。市内の住民への周知や市外からの花ふるの来場者が郷土資料館へ来館に繋がる流れとなる事で恵庭の魅力となり今後の観光コースなど検討事項ではないかと考えます。柏原市立歴史資料館は正に歴史を学ぶ資料館としてとても見応えがあり重要な役割を果たしているが、市民への周知や高台で住宅街の中にあり市民の認知度もなかなか難しいとのことでした。市内外からの多くの来館者が足を運んでくれることを模索していた。時代に即した周知やイベントの工夫、観光への拡大、郷土資料館の施設のあり方など、今後恵庭市歴史を誇る重要文化財がまちの発展となる様取り組んでいきたい。</p>

視察研修先・兵庫県加古川市

視察研修項目・加古川市版デシディムについて

報告者・ 松島 緑

恵庭市では政策形成過程において市民参加型のパブリックコメントを実施している、各支所での計画案の閲覧。政策に対しての意見募集方法として、持参・郵送・ファックス・電子メール・意見箱など実施。多くのパブリックコメントが実施されるも、特定の案件では0件となる事例があり手法への課題があると考え、今回の加古川市デシディムを視察することとした。

加古川市では市民の幸福感や住みやすさを感じることができるスマートシティを目指していた。デジタル技術を用いた主な取り組みとして、見守りカメラ、見守りサービス。デシディムの導入、オンライン申請等の窓口業務改革、地上デジタル放送波を用いた災害伝達手段、GIGA スクール、ワンコイン浸水センサを用いた防災対策などである。

加古川市がスマートシティを目指したきっかけとして、課題として刑法犯認知件数（犯罪発生数が多かった）この事には驚いた。市民の利便性の向上や業務の効率化と言うよりも犯罪発生率が高いことも地域性なのか、きっかけについては様々であると感じた。

最優先の課題として子供の安全・命を守る観点からも見守りカメラ設置を進めていた。町内会などが設置する防犯カメラへの補助事業に加えて、1,475 台設置（各小学校区ごとに50台）の見守りカメラ設置運用。各地域でオープンミーティングの開催や条例を制定等でプライバシー保護に配慮した、丁寧なアプローチがスマートシティ業界から注目されるようになった。例えば個人宅が映る場合プライバシーマスク適用で設置していた。

本市でも防犯カメラ設置については個人宅の情報の漏洩などが懸念事項なことからプライバシーマスク機能は住民も安心できると感じた。平成29年から見守りカメラを設置してから今現在までに4割犯罪が減少しているのも防犯としての機能は効果はあると感じた。それだけに止まらず、更に令和4年度より高度見守りカメラ150台設置（悲鳴等の異常音検知し周辺に警告、自動車危険運転検知機能歩行者に注意喚起する、交通量や人流データ自動把握はまちづくりの検討に活用）見守りアプリを活用した高齢者や子供たちを町全体で見守る。利用者全体でアンケート調査、結果として児童・高齢者双方で高評価であった。

加古川デシディムは地域の未来について意見出し合い議論するためのオンラインツール、アカウント作成でだれでも参加可能。

加古川スマートシティ構想→市民中心・市民の生活向上が目的。デジタル技術導入がゴールではない、課題解決のために市民同意を得ながら見守りカメラ設置。更なる市民サービスの向上→新施設（複合施設）の愛称決定にデシディムの投票機能活用していた。加古川市のデシディムについては様々な形で幅広い世代特に若い世代も参加しやすいシステム、また市民の声がすぐに反映しやすくまちづくりとしても市政運営の一助となっている。本市としても市民が参加し声が反映しやすい、時代に即した取り組みとしてデシディムについては今後参考となる視察研修となった。

視察研修先・大阪府立富田林中学校・高等学校
視察研修項目・大阪府立富田林中学校・高等学校における富校版コミュニティ・スクールの取組について
報告者・川股洋一
<p>前日の1月13日がホワイトアウトになる荒天で14日8時30分発の旅客機が飛ぶかどうか心配されましたが、定刻に出発できました。</p> <p>近畿電鉄南大阪線 富田林駅を降り昼食に教頭先生お薦めのお蕎麦屋さんでお腹を満たし大阪府立富田林中学校・高等学校を訪問させて頂きました。</p> <p>教頭先生がお出迎え下さり校門の施錠を解除してくだされ、学校敷地内に入りました。第一番に目にするのは、全国高校バトントワリング大会金賞受賞、また、中学・高校バトントワリング大会最優秀賞受賞と輝かしい記録が目立ちました。</p> <p>富田林高校は、125年の歴史を持つ平均偏差値58～62であり大阪府の公立高校の中でも上位に位置し、中学部は選抜試験があり難易度は高い学校です。</p> <p>2017年に大阪府立で初めての併設型中高一貫教育校となりました。</p> <p>今回は、先進的な取り組みの富田林版コミュニティースクール（学校運営協議会制度）の推進について考察してきました。</p> <p>目的として、子供たちが地域に愛着を持ち、健やかに成長できるよう、3本の柱を上げておきます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域で子供を育てるとして、地域の豊かな経験や知識を教育活動に活かす。</li> <li>・学校を核とした地域づくりとして、学校を拠点として多世代が交流し、地域の活性化を図る</li> <li>・「塾議」による合意形成として、先生、保護者、地域住民が対等な立場でよく話し合い共通のビジョンをもつことです。</li> </ul> <p>おもな役割と仕組として、校長は、学校経営方針を提案する。委員は、地域住民や保護者で、方針を承認して運営について意見を述べる。地域コーディネーターは、学校ニーズと地域の支援をマッチングさせるなどの役目があります。</p> <p>具体的な活動例ですが、学習支援として放課後学習やミシンや習字のサポートやグロスタイナーチャーター等があります。</p> <p>また、環境整備活動として校内の草刈りや花壇の整備、図書室の整理があります。さらには、安全見守りとして、登下校時のパトロール、防災訓練の合同実施を行い。伝統文化の継承として地元の祭りなどの歴史をン学授業や地域行事への参加も行っておりました。</p> <p>特に富田林中高一貫校におけるコミュニティースクールは、通常広域から生徒が集まって来ることから、地域との繋がりが希薄になりがちだが、同校は「富田林の教育の核として」地域に深く根ざし連携しておりました。</p> <p>運営協議会の在り方として学校運営方針に対し、外部の有識者、地元企業、同窓会、保護者が意見を述べ学校を支援しておりました。</p> <p>「南河内」をフィールドに地域の歴史や産業をテーマにした「探求学習」をカリキュラムとして盛り込んでおりました。</p>

中高一体の推進として中学生、高校生が共に地域の課題を解決する事に取り組み、6年間を通じた深い地域貢献を経験することが出来ます。

「富田林版」コミュニティースクールでの更なる特徴は、例えば単なる清掃ボランティアなどではなく「知の交流が」が盛んな事です。

探求学習では、地元の寺内町や地場産業をテーマにせいとが課題解決策を提案したり、キャリア教育では、地元企業や富田林市役所と連携したワークショップや講演会などの開催があり、地域の祭りやイベントへの運営スタッフとして参加協力していました。

また、地域の住民を対象とした公開講座や、部活動をとおして交流を深めています。

大阪府立の中高ですが、富田林市との包括連携協定と同等の形で動いていました。

生徒自身が寺内町の魅力を発信するプロジェクトを企画もしておりさらに、しの総合計画やまちづくりに対して高校生の視点からのアイデアを届ける機会が設けられています。

2017年の中高一貫校依頼「地域を愛し、世界に羽ばたくグローバルリーダー」の育成を揚げコミュニティースクールの仕組みを活用する事で「教科書の中だけの学習」ではなく「社会で通じる実践的な力」を養う場として機能していました。

素晴らしい地域との関りや取り組みを強く感じました。

視察研修先・大阪府柏原市
視察研修項目・柏原市立歴史資料館における古墳出土品及び展示企画の取組について
報告者・川股洋一
<p>大阪府柏原市は、世界遺産「百舌鳥・古市古墳群」の東側に位置し、数多くの古墳や遺跡が眠る歴史の宝庫です。柏原市立歴史資料館では、これらの貴重な文化財を未来へつなぐため、専門的な保存管理と魅力的な展示企画の両立に取り組んでいます。</p> <p>具体的にどのような活動が行われているのか</p> <p>古墳時代資料の宝庫柏原市には、国史跡の高井田横穴群や、前期古墳の玉手山古墳群など、全国的にも注目される遺跡が多数存在します。横穴墓の線刻壁画：資料館では、高井田横穴から発見された人物や船の壁画（線刻）をメインに扱っています。埴輪と副葬品：市内の古墳から出土した円筒埴輪や、精巧な副葬品が収蔵・展示されています。</p> <p>湿度・温度管理（保存の要）</p> <p>出土品、特に金属製品（鉄剣など）や木製品は、湿度の変化に非常に敏感です。徹底した環境維持：資料館の収蔵庫や展示室では、空調設備により24時間体制で温度・湿度を一定に保っています。中性紙・保存容器の使用：湿気や酸性化による劣化を防ぐため、資料は専用の保存箱（中性紙）に入れられ、棚の配置にも通気性が考慮されています。</p> <p>現場（横穴墓）の保護：歴史資料館の管理下にある高井田横穴群などの実地遺構では、カビの発生や岩盤の崩落を防ぐため、密閉度の調整や定期的な清掃、水分量のモニタリングが行われています。</p> <p>展示企画の取り組み</p> <p>「ただ並べるだけ」ではなく、市民や歴史ファンが歴史を自分事として捉えられる工夫がなされています。テーマの絞り込み「横穴」「古代の道」「古墳の終わり」など、柏原市の地域特性を活かした独自の切り口で企画展を開催。</p> <p>デジタル・ビジュアル活用文字情報だけでなく、図解や復元模型を用いることで、専門知識がなくても視覚的に理解できる展示を目指しています。</p> <p>・フィールドワークとの連動：館内での展示だけでなく、実際に古墳を歩く「歴史ウォーク」や、勾玉作りなどのワークショップを通じて、体験型の学びを提供しています。</p>

視察研修先・兵庫県加古川市

視察研修項目・加古川市版デシディムについて

報告者・川股洋一

加古川市の「デジディム」は、正しくは「Decidim(デシディム)」という、市民がオンライン上で意見を出し合い、まちづくりについて議論するための市民参加型合意形成プラットフォームのことで

す。

加古川市は 2020 年 10 月に、日本国内の自治体として初めてこのシステムを導入しました。加古川市版 Decidim(デシディム)とはスペインのバルセロナで開発されたオープンソースのツールで、「自分たちで決める」という意味の言葉に由来しています。主な特徴は以下の通りです。誰でも参加可能: スマートフォンやパソコンから、いつでもどこでも意見交換や議論に参加できます。プロセスの透明性: どのような意見が出て、それがどのように政策に結びついたかのプロセスが可視化されます。リニューアル: 2025 年 1 月 31 日にサイトがリニューアルされ、スマートフォンからより見やすく、使いやすいデザインになりました。

これまでの活用例これまでに以下のようなプロジェクトで市民の意見募集や投票が行われました。「かこてらす」の愛称決定: 東加古川の子育てプラザを含む複合施設の愛称を、市民投票によって決定しました。

スマートシティ構想の策定: 加古川市の未来像について市民から広く意見を募集しました。

かわまちづくり計画: 加古川の河川敷の利活用についてのアイデア募集。

公式サイトからアカウントを作成することで、現在募集中のテーマに対してコメントや「いいね」でリアクションしたり、新しいアイデアを投稿したりすることができます。

恵庭市では、パブリックコメントで市民の声を聞く事が多いと感じています。

プラットフォームを駆使して、双方向型の意見を聞いてゆく DX が必要だと感じていますし

私たちも市民の代表であり代弁者でありますから、さらに DX の工夫が必要です。

視察研修先・大阪府立富田林中学校・高等学校（大阪府富田林市）
視察研修項目・大阪府立富田林中学校・高等学校における富校版コミュニティ・スクールの取組について
報告者・柏野大介
<p>&lt;富田林市の概要&gt; 面積：39.72 km<sup>2</sup> 人口：104,806 人（令和 7 年 12 月末） 世帯数：52,329 世帯（令和 7 年 12 月末）</p>
<h3>1. 概要</h3> <p>富田林高校は創立 125 年を誇る伝統校であり、9 年前に中学校を併設して併設型中高一貫教育を開始した。生徒の約 7 割が南河内地区から、約 2 割が富田林市内から通学している。「グローバルリーダーの育成」を教育目標に掲げ、社会貢献と地域愛を育む教育を実践している。大阪府立高校には全校にコミュニティ・スクール（CS）が設置されているが、同校では「富校版 CS」として、同窓会が中心となった独自の支援体制を構築しているのが特徴である。</p>
<h3>2. 主な取組</h3> <p>①<b>同窓会による強力な支援</b>：同窓会が母体となり NPO 法人「まなびと育ち南河内ネットワーク」を設立し、教育資金の提供や弁護士等の専門人材の派遣を行っている。</p> <p>②<b>CS コーディネーター（CO）の組織化</b>：同窓生、元 PTA 会長、社会教育委員などで構成される「コーディネーターズ」が結成されるなど、学校と地域をつなぐ人材が豊富である。</p> <p>③<b>独自の奨学金制度</b>：CS と地域学校協働活動の一体的実施の一環として、独自の奨学金制度を設置している。</p> <p>④<b>親学習の実施</b>：学校運営協議会において保護者同士の接点を強化するための「親学習」を実施している。</p>
<h3>3. 考察と見解</h3> <p>富田林市の事例で特筆すべきは、同窓会という既存の組織を「地域資源」として最大限に活用し、学校運営に深く関わらせている点である。恵庭市においても、各校の卒業生や PTA の OB などとの連携を再定義し、単なる行事手伝いではない「学校運営のパートナー」としての参画を促す余地がある。また、府立学校（広域自治体）でありながら、地元市（基礎自治体）や地域住民との接点を「社会貢献・地域愛」という目標でつなぎ合わせている点は、中高一貫教育や高校の魅力化を考える上で非常に参考になる。恵庭市内の学校においても、地域の専門家や OB が授業や部活動、キャリア教育に組織的に関わる仕組み（学校協働本部）を強化していくことは、大きな可能性が期待できる。</p>

視察研修先・大阪府柏原市
視察研修項目・柏原市立歴史資料館における古墳出土品及び展示企画の取組について
報告者・柏野大介
<p>&lt; 柏原市の概要 &gt;</p> <p>面積：25.33 km<sup>2</sup></p> <p>人口：66,131 人（令和 7 年 12 月末）</p> <p>世帯数：33,008 世帯（令和 7 年 12 月末）</p> <p><b>1. 概要</b></p> <p>柏原市立歴史資料館は、延床面積約 1,500 平米を有し、市内の古墳出土品を中心に展示・保管を行っている。人口減少や学習指導要領の変更により、校外学習での来館者数が減少傾向にあるという課題を抱えつつも、多様な企画展やデジタルコンテンツの活用で市民への周知を図っている。</p> <p><b>2. 主な取組</b></p> <p>①「飽きさせない」展示工夫：年 4 回の企画展に加え、特集展示（民具）を実施し、「いつ行っても同じ」という印象を払拭する努力をしている。</p> <p>②デジタル活用：ビジュアルヒストリーガイド（VHG）として、月に 1 回程度の動画配信を行い、資料館の魅力を発信している。</p> <p>③収蔵スペースの確保と低コスト運用：収蔵庫として水道施設跡地を活用しており、維持費を抑制した中で、資料の収蔵（現在約 6,000 箱）に努めている。</p> <p>④ミュージアムグッズの展開：付箋やトートバッグなど、実用的で手に取りやすいグッズを制作・販売し、親しみやすさを醸成している。</p> <p><b>3. 考察と見解</b></p> <p>柏原市では、限られた予算と人員の中で、既存施設の活用による収蔵スペースの確保や、動画配信などのデジタルツールを積極的に取り入れている。恵庭市においても、郷土資料の散逸を防ぐための収蔵庫確保は長年の課題であるが、すでに水道施設などは活用されており、今後はガイダンス施設整備などに合わせた収蔵スペースの確保が求められる。また、展示内容を固定化せず、市民の要望や出張展示（府立図書館等）を通じて「動く博物館」としての機能を強化している点は、市民の歴史意識を高める上で有効である。</p> <p>恵庭市においても、一部の資料のデジタルアーカイブをウェブ公開しているが、動画コンテンツによる解説は、魅力を発信する取組として非常に参考になるものだと感じた。</p> <p>また、近隣の私鉄が仕掛けている「謎解きツアー」は、受動的な関わりということであったが、近隣の自治体などと連携して、企画をすることができれば、新たな利用者層の開拓に大きな効果があるものと考えられる。</p> <p>柏原市立歴史資料館公式チャンネル  <a href="https://www.youtube.com/@柏原市立歴史資料館公/videos">https://www.youtube.com/@柏原市立歴史資料館公/videos</a></p>

視察研修先・兵庫県加古川市
視察研修項目・加古川市版デシディム (Decidim) について
報告者・柏野大介
<p>&lt;加古川市の概要&gt;</p> <p>面積：138.48 km<sup>2</sup></p> <p>人口：255,619 人（令和 7 年 12 月 1 日）</p> <p>世帯数：120,201 世帯（令和 7 年 12 月 1 日）</p> <p><b>1. 概要</b></p> <p>加古川市は、デジタル技術を活用して市民の意見を政策に反映させるオンラインプラットフォーム「デシディム (Decidim)」を導入している。デジタル改革推進課が担当し、従来の対面型市民参画や広聴活動とデジタルをいかに融合させるかに注力している。</p> <p><b>2. 主な取組</b></p> <p>①<b>デジタル技術の活用</b>：見守りカメラ、見守りサービスのほか、防災対策まで、行政課題への対応策として、デジタル技術が活用されている。</p> <p>②<b>政策反映プロセスの可視化</b>：寄せられた意見がどのように扱われ、政策に反映されたかを市民に周知する仕組みを重視している。</p> <p>③<b>既存広聴との連携</b>：ワークショップの結果をデシディム上で公表するなど、アナログ（対面）とデジタルの重複を避けつつ、相乗効果を狙っている。</p> <p><b>3. 考察と見解</b></p> <p>加古川市のデシディム導入において最も重要な視点は、「デジタルは手段であり、目的は市民参画の質の向上」であるという点である。刑法犯の認知件数が多いという課題があり、スマートシティ構想の中で防犯カメラの設置を進めた際にも、市民の不安に正面から向き合い、不安の払拭に努めてきたことが、大きな信頼につながっているものと感じられる。</p> <p>恵庭市でも DX 推進計画が進められているが、単なる手続きのオンライン化にとどまらず、加古川市のように「市民の声を聴くツール」としてのデジタル活用は、有効と考えられる。従来のコミュニティに属していない市民や、若年層など従来の対面式説明会に参加しにくかった層の意見を吸い上げる上で、LINE のような手軽さを持つインターフェースの活用は非常に効果的である。</p> <p>登録人数の目標値は掲げていないということであったが、出前授業のような形で、高校生や大学生と一緒に取組を進めていることが若い世代の参加者増加につながっているということであった。まちづくりに参加しているという意識が、まちへの帰属意識の醸成にもつながっていると考えられ、まさに協働のまちづくりの深化につながる取組だと考えられる。</p>

視察研修先・大阪府立富田林中学校・高等学校
視察研修項目・大阪府立富田林中学校・高等学校における富校版コミュニティ・スクールの取組について
報告者・武藤 光一
<p>* 設立経緯</p> <p>富田林高校の卒業生や地域の方々からの強い要望に応える形で、平成 29 年度に府立初の併設型中高一貫校として設置した</p> <p>* 学校概要</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1, 教育目標・・・地球的視野に立ち、地域や国のことを考え行動し、国際社会に貢献できるグローバル・リーダーの育成</li> <li>2, クラス数・・・中学校：1 学年 3 学級 1 2 0 名、高等学校：1 学年：6 学級 240 名</li> <li>3, 教育内容・・・6 年間を 2 年ごとの 3 期に区分し、中学 1・2 は基礎期、中学 3 年生・高校 1 年生は充実期、高校 2・3 年生は発展期として、それぞれの発達段階に応じた教育課程及び教育内容を計画的に実施している</li> </ol> <p>* 様々な取り組みとその成果</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1, SSH（スーパーサイエンスハイスクール）指定校 「探究活動」「地域連携」「海外連携」の 3 つのプロジェクトを軸に、企業や地域団体と連携して解決する取り組みを実施→サイエンスキャッスル関西大会 2022 優秀賞等多数受賞</li> <li>2, 海外連携→6 年間を見据えたグローバル教育を推進（同窓会・NPO から研修費支援あり）</li> <li>3, 同窓会・NPO からの支援→中高一貫校記念館建設の費用や生徒の語学研修への助成など</li> <li>4, 地域からの支援 大学や企業、行政など 150 以上の団体と連携を図り、地域と一体となって特色ある探究活動を展開することで、地域活性化に寄与している</li> </ol> <p>* 課題</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1, 地域の中学校と比較すると、通学区域が広範囲にわたり、家庭との物理的な距離があることから不登校生徒への迅速な支援などが難しい場合がある</li> <li>2, 中進生については、いわゆる高校入試がないことなどを背景として、生徒間での学力や学習意欲の差が顕在化しており、きめ細やかなフォロー体制の充実が必要</li> </ol> <p>* 考察</p> <p>富校版コミュニティ・スクールの特徴は、コミュニティ・スクールの仕組み活かした教育活動を目指していることにあると思います そのめざすのは「地球的な視野に立ち地域や国のことを考え、国際社会に貢献できるグローバルリーダーの育成」です 実践として イングリッシュ・キャンプ、モーニング・イングリッシュタイム（中学）、海外修学旅行（台湾、ベトナム）、これらは地域・同窓会 NPO などの支援のおかげですが、一貫校の設立やコミュニティ・スクールへの支援を得るために最も大切なことは「その学校がどのような人材を育てたいのか」を 地域 同窓会 大学 行政 企業に理解してもらうことだと思います</p>

視察研修先・大阪府柏原市
視察研修項目・柏原市立歴史資料館における古墳出土品及び展示企画の取組について
報告者・武藤 光一
<p>*施設</p> <p>鉄筋コンクリート造 3階建 建築面積 759.820 m<sup>2</sup></p> <p>1階：資料 機械室 2階：展示室 3階：研修室 学芸員室</p> <p>*展示</p> <p>企画展：春季企画展 夏季企画展 秋季企画展 冬季企画展</p> <p>特集展示：高井田横穴群 企画展関連 大和川関連資料</p> <p>イベント：横穴公開 文化財講座 古文書講座 文化財講演会 続・柏原の歴史講座など</p> <p>*展示品の維持と展示しきれない資料の維持について</p> <p>比較的展示する機会が多い資料や古文書、貴重な資料などは空調設備の備えた館内、それ以外の資料は館外の収蔵庫に保管</p> <p>*学術的資料と古い生活道具の混在についての考え方</p> <p>当館は市内の発掘調査で見つかった土器などの考古資料が主体ですが、それ以外にも、寄贈による古文書や絵図、民具なども多数所蔵しており、柏原の歴史を物語る重要な資料と位置づけ、展示・保管しています</p> <p>*貴重な古墳出土品の保存・管理において、温湿度管理やセキュリティ対策の具体的な方法、および専門人材の育成や確保について、どのような取り組みを行っているのか</p> <p>当館の展示室・収蔵室は、文化庁が定める温度 22 度前後、湿度 50～55%に保つよう空調を設定し、夜間の機械警備も備えています 展示・研究・調査を担当する正職員の学芸員は 3 名（考古担当 2 名、古文書担当 1 名）、会計年度任用職員の学芸員は 2 名（考古担当 1 名、古文書担当 1 名）です</p> <p>来年度、新たな学芸員（考古担当）を採用予定で、明確な育成計画などはありませんが、予算が確保できれば国立文化財機構奈良文化財研究所が実施している文化財専門の研修に参加予定です</p> <p>また、将来的に正職員の欠員があれば、新たな学芸員を採用する方針です</p> <p>*常設テーマ</p> <p>1, 稲づくりの始まり 2, 古墳をつくる 3, 横穴と大泉の鉄 4, いろいろな埴輪</p> <p>5, 古代の寺院 6, 中近世の柏原 柏原とぶどう</p> <p>*国史跡 高井田横穴（たかいだよこあな）</p> <p>横穴とは岩盤を洞窟のように掘って造った墓で、高井田横穴では、6～7 世紀の横穴が約 160 基見つかっています そのうち 20 基ほどが間近で見学できる</p> <p>*考察</p> <p>圧倒的な歴史の深さに感動しました。高井田横穴の保存状態の良さにも驚きました。学術的な資料と古い生活道具の混在については、それらも歴史を物語る重要な資料と位置づけ、展示・保管しているとのことでした。大変、参考になりました。</p>

視察研修先・兵庫県加古川市
視察研修項目・加古川市版デシディムについて
報告者・武藤 光一
<p>*兵庫県加古川市</p> <p>人口：253,256人 世帯：111,177世帯</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・一級河川加古川の河口部に位置し自然を満喫できる</li> <li>・播磨地域の工場地帯の一部を構成</li> <li>・神戸や大阪、姫路に短時間でアクセスできる</li> </ul> <p>*加古川市におけるデジタル技術を用いた主な取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・見守りカメラ、見守りサービス</li> </ul> <p>平成29年度から「見守りカメラ」約1500台を設置：設置から4年で刑法犯数が半減          刑法犯数：平成29年 2926件→令和2年 1684件          令和4年度、AI搭載の「高度化見守りカメラ」150台を設置→悲鳴音検知、危険運転検知、行方不明者の早期発見に寄与</p> <p>*Decidim（デシディム）の導入</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「Code for Japan」と協定を締結し、オンラインの市民参加型合意形成プラットフォームを国内初導入</li> </ul> <p>加古川市に関心のある方々がまちづくりのアイデアや意見をインターネット上で出し合い、気軽に話し合えるオンラインの場所          アカウントを作成すれば、どなたでも簡単に意見交換や議論に参加できる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・加古川市スマートシティ構想</li> </ul> <p>2021年の策定時は兵庫大学とともに、「協働のまちづくり市民会議×熟議2023」で議論          2021年の策定時、2024年の一部見直しにあたり Decidim を活用し、市民等から広く意見を募集          現在、Decidim 上でスマートシティ構想をテーマに意見募集中</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・Decidim の投票機能を活用</li> </ul> <p>新しい複合施設（子育てピュラザ＋公民館）の愛称に、投票機能を活用          「かわまちづくり」の取組の中で、「Decidim」を活用し様々なアイデアを書き込んでいただいている</p> <p>*考察</p> <p>防犯カメラの犯罪抑止力は相当なものだと思います。恵み野西においても恵庭市の補助金を活用して昨年4か所目の防犯カメラを設置しました。加古川市に倣って、今後も防犯カメラの設置を進めていこうと思います。Decidim については、パブリックコメントが不人気な中で、市民の声を吸い上げる有効な手段だと思います。</p>

視察研修先・大阪府立富田林中学校・高等学校
視察研修項目・大阪府立富田林中学校・高等学校における富校版コミュニティ・スクールの取組について
報告者・矢野浩章
<p><b>【富田林市の概要】</b></p> <p>○富田林市は、大阪府の南東部（南河内地域）に位置する、人口約 10 万人（令和 8 年現在）戦国時代に創建された「寺内町」が今なお保存されており、重要伝統的建造物群保存地区に指定されるなど、歴史情緒あふれる文教都市としての側面を持ち、「教育・文化を大切にすまち」を掲げ、生涯学習や地域と学校の連携に力を入れている</p> <p>◆視察の目的</p> <p>大阪府立富田林中学校・高等学校が展開する「富校版コミュニティ・スクール」の先進事例を調査すること</p> <p><b>【考察と見解】</b></p> <p>今回の視察で何より印象に残ったのは、富田林中高を取り巻く「人の熱量」の高さです。ここでは、学校が単に地域へ支援を求めるといった段階を超えています。生徒、教員、保護者はもちろん、同窓会組織「八翠会」や地元の寺内町関係者の方々が、「自分たちの富校をどう良くしていくか」という共通の目的を驚くほど自然に共有していました。学校運営協議会が形式的な会議体にとどまらず、実効性のある「応援団」として機能している姿は、地域総がかりで教育を行う一つの理想形と言えます。</p> <p>特に注目すべきは、探究活動のフィールドとして地域が最大限に活用されている点です。地域の課題解決や歴史学習が学びの中に組み込まれており、コミュニティ・スクールという制度が、生徒が社会へ飛び出すための「生きたプラットフォーム」として息づいていました。</p> <p>また、大阪府立校でありながら富田林市との連携が極めてスムーズである点も、本市にとって大きな示唆を与えてくれます。設置者の枠を超えた柔軟なネットワークが構築されている背景には、「地域の子どもは地域で育てる」という揺るぎない合意形成があるのでしょう。</p> <p>本市においても、既存の枠組みに「卒業生のネットワーク」や「地域資源を活かした探究学習」をより強固に編み込んでいくことで、地域に根ざした活力ある教育環境を創造できるはずです。制度を単なる「運用」レベルで終わらせず、一つの「文化」へと昇華させていく。そのためのヒントを多く得られた視察となりました。</p>

視察研修先・大阪府柏原市
視察研修項目・柏原市立歴史資料館における古墳出土品及び展示企画の取組について
報告者・矢野浩章
<p><b>【柏原市の概要】</b></p> <p>○大阪府の東部、奈良県との府県境に位置する柏原市は、人口約 6 万 6 千人、面積 25.39 平方キロメートルの都市です。市域の約 3 分の 2 を山間部が占め、中央部には大和川が流れる自然豊かな風土を有し、歴史的には古くから交通の要衝として栄え、市内には日本遺産に認定された「龍田古道・亀の瀬」や、近畿地方最古級の「高井田横穴群」など、数多くの歴史的資源が点在しています。また、特産品としては「柏原ぶどう」や、伝統工芸品である「浪華本染め」が全国的に知られており、歴史と伝統産業が共存するまちづくりを進めている。</p> <p><b>◆視察の目的</b></p> <p>柏原市立歴史資料館における古墳出土品の保存・管理体制、およびそれらを活用した展示企画の取組を調査することであり、特に同館が中心となって進めている「高井田横穴群」などの貴重な文化財を、単なる展示物としてだけでなく、地域の歴史教育や観光資源としてどのように市民に還元しているか、その手法を学びます。本市の文化財保護および生涯学習施策への応用可能性を検討する一助とすること</p> <p><b>【考察と見解】</b></p> <p>今回の柏原市の視察で特に強く感じたのは、歴史を「遠い過去の出来事」に留めず、市民が「自分たちの物語」として捉えられるような伝え方の巧みさです。専門的な古墳出土品の傍らに、市民から寄贈された身近な民具を織り交ぜた展示は、歴史と今の暮らしとの繋がりを自然に伝えていました。規模の差こそあれ、本市の郷土資料館においても「市民の目線」に立ったこうした工夫は、歴史理解を深めるための大きなヒントになると感じます。</p> <p>また、史跡高井田横穴公園と隣接する立地を最大限に活用し、館内の展示と現地の体験をセットで提供している点も非常に理想的でした。本市でも史跡公園等の整備が進んでいますが、単に解説パネルを設置するだけでは、本当の意味での学びは生まれません。今回目にしたような、来館者の興味を現地へと誘い出す「動的な学習プログラム」の構築こそが、今後の本市に求められている施策であると痛感しました。</p> <p>運営面では、頻繁な企画展の更新や、コロナ禍を経て定着したオンライン発信の活用が印象的でした。これらは単なる情報提供ではなく、「次は実物を見に行きたい」と思わせる動機付けとして機能しており、生涯学習を推進する上での有効なモデルと言えます。資料の保管場所の確保といった、本市とも共通する切実な課題にも直面しましたが、それ以上に「見せ方」と「伝え方」の工夫次第で、文化財は地域の誇りになり得るのだと再確認しました。柏原市の柔軟な企画力と地域密着型の運営手法を、本市の教育施策や資料館運営にぜひ反映させていきたいと考えます。</p>

視察研修先・兵庫県加古川市
視察研修項目・加古川市版デシディムについて
報告者・矢野浩章
<p><b>【加古川市の概要】</b></p> <p>○加古川市は兵庫県の南東部に位置し、一級河川「加古川」の豊かな水系と、瀬戸内海の穏やかな気候に恵まれた特例市である。人口は約 26 万人（令和 8 年現在）を擁し、播磨臨海工業地帯の一角をなす工業都市としての側面と、豊かな田園風景が共存している。</p> <p>近年、同市は「スマートシティ加古川」を掲げ、ICT（情報通信技術）を積極的に活用した市民参加型のまちづくりを推進している。</p> <p><b>◆視察の目的</b></p> <p>加古川市スマートシティ構想を進めている中として、加古川市が運用するデジタル市民参加合意形成型プラットフォーム「加古川市版デシディム」の具体的な運用実態、導入の背景、および市民参加の変容を調査すること</p> <p><b>【考察と見解】</b></p> <p>加古川市が導入している「加古川市版デシディム」の活用事例で特筆すべきは、見守りカメラの設置場所を決定するプロセスにあります。数値データだけでは捉えきれない「夜間に不安を感じる通学路」や「死角になりやすい公園の隅」といった、市民一人ひとりの体感的な不安をピンポイントで収集できている点は、限られた予算で最大の防犯効果を生むための、非常に合理的かつ民主的な手法だと感じました。</p> <p>現在、加古川市内には約 1,500 台という驚くほど多くのカメラが設置されています。これほどの規模になると、通常は「監視社会」への懸念やプライバシーの問題が強く意識されるはずですが、しかし、同市ではデシディム上で「なぜここに設置が必要か」という議論を可視化し、市民自身がプロセスに関与しています。これにより、一方的に「監視されている」という感覚を、自分たちで街を「見守っている」という当事者意識へと転換させており、合意形成のあり方として一つの完成形と言えるでしょう。</p> <p>本市においても、通学路の安全確保や公園の防犯対策は課題の一つです。加古川市の事例から学ぶべきは、単なるデジタルツールの導入ではなく「デジタル地図上で意見を可視化し、対話を生むことの有用性」です。防犯・防災計画の策定時にこうした「市民参加型マッピング」を取り入れることができれば、エビデンスに基づいた効果的な設備投資が可能になるだけでなく、市民の安心感も大きく高まるはずですが。</p> <p>過去の事件への反省から始まったこの取り組みは、行政の透明性を高めるだけでなく、市民が自らの街の安全に責任を持つ「共助」の精神をデジタルで後押しするものです。本市でも、ICT を活用した安全なまちづくりの一環として、こうした「場所の選定への市民参画」の仕組みを積極的に提案していくべきだと確信しました。</p> <p>※尚、この視察においては岡山県真庭市との合同行政視察として開催された。</p>